



サンプル(写真上) 分析用焼却灰(写真下)



元素分析の機械



「僕の心の中は、写さないで」と冗談を言いながらたくさんのお話をしてくれました

ゴミ分析の工程は、焼却炉の生ゴミ200kgを縮分し、その中から20kgを乾燥、破砕させサンプルを作り、800℃で燃やし焼却灰や炭素ガスを調査します

## 確かな分析力で培った「ぶれない気持ち」



### 有限会社 小樽分析工業所

色内2丁目にある(有)小樽分析工業所は、食品分析や産業廃棄物などの工業分析を行っている事業所です。

代表取締役の笹島進氏は、サンプル収集、分析、報告をひとりで行なっています。

#### 石炭から終末処理水の分析へ

日本遺産の炭鉄港の歴史にもあるとおり、昭和30年頃まで、小樽は空知から運ばれてきた石炭の積み出し港でした。当時、蒸気機関車や家庭の暖房、製鉄の燃料の主体であった石炭は、炭素が多いほどよく燃えるため、分析結果が石炭の価格を決めていました。

石炭を事業所に運び、砕いて、わずかに1グラムのサンプルを取り出し、その日のうちに成分を分析していました。

昭和24年、当時、民間の分析所は、道内で自社のみでした。昭和30年頃から高度経済成長に伴い、公害問題が社会問題化し、道庁や市役所などから大気・水質の分析依頼があり、仕事に追われていた、父親の姿を思い出そうでした。

この頃から、民間の分析所が増

いるそうです。

「生きている限り仕事は続けていきたい。天候が悪かろうと雪で道が狭くても、自分の車でゴミ焼却所までサンプルを取りに行っているよ」と、失礼ながら78歳とは思えないほどお元気で前向きさが伝わってきました。

仕事の経験を通じて確かな結果を示すことで、何事も自分の意思を貫く「ぶれない気持ち」を持つようになったそうです。

#### 歴史的文化都市の魅力

昭和61年、当時の小樽の2大イベントであった「おたる潮まつり」と「ポートフェスティバル」を連動させた「おたるサマーフェスティバル」は、歴史的建造物のライトアップや道路を通行止めにして開催したジャズコンサートなどで、夏の小樽を盛り上げていました。

その第1回実行委員長を務めたのが笹島社長でした。笹島社長は小樽は歴史的文化都市であり、埋もれた歴史を掘り起こし、運河を活かす活動もしていました。

サマーフェスティバルは平成6年に終了しましたが、「浅草橋オールデーナイト」などのイベン

え、また、大手企業は社内分析部門を設けるようになったそうです。

#### 分析を続けて

笹島社長は、医療系を目指して北里大学衛生学部に入学しましたが、教授からの勧めで細菌学を学ぶことになり、大学卒業後は三重県庁技術吏員(衛生部食品衛生監視員)として勤めていました。昭和47年、以前から父に仕事を手伝って欲しいと言われていたこともあり、小樽に戻って事業を引き継ぎました。

最近の主な分析依頼は、食品の細菌検査や無添加石炭、ゴミの成分分析の依頼が各地から寄せられています。

ゴミの成分分析は、焼却炉を傷めないよう成分の量を調べるため、焼却炉の生ゴミを縮分したものを乾燥、破砕、混合して約一週間かけて法律に基づいて分析を行っています。

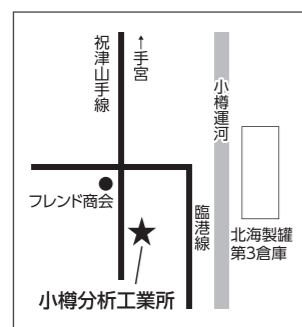
手間がかかるため、引き受けないところが多いそうですが、笹島社長は「頼まれたら、できないとは言いたくない。やってやる」という気持ちになる」と引き受けて

トが現在も開催されており、笹島社長の小樽を盛り上げたいという想いは次の世代に引き継がれています。

笹島社長は「運河や歴史的建造物に囲まれて聴くJAZZは、他の街ではできないし、雰囲気は海外にいるようで最高だね。ずっと続いてほしいな」と語っていました。

長い年月を掛けて、分析という仕事に打ち込んできた技術と自信が裏付けとなって、どんな仕事も真摯な姿勢で取り組む姿が印象的だ。

今度は、小樽の懐かしい話を聞いてみたいと思いました。



(有)小樽分析工業所  
小樽市色内2丁目16-8 TEL 22-3855  
E-mail susumu-s@xc4.so-net.ne.jp